

に退きたまひたる時、執政のいはく、本朝通鑑全部をもたせ參られて、此書成功し侍ま、梓行の命を下すべきよしの御事につけて、各位へ知らせ奉るべきとの上意にさぶらふと申されければ、おのゝ珍重のよし御まきだいで有けり、とばかりして、西山公、一二巻を電覽しましたれば、本朝の始祖は、吳の太伯の胤なるよし書たるにおどろきたまひて、そもこれはいかなる狂惑の作爲ぞや、後漢書以下に、日本を姬姓のよしあるしたるは、往昔吾國亡命のもの、あるは文盲の輩など、かしこに渡りて杜撰の物語せしを、彼方のものは、まことにさなむと意得て、書傳へたるなり、吾國にはおのづから日本紀古事記等の正文あり、それにそむきて、外策志傳によりて、神皇の統をけがさんぞす、甚かなしむべし、むかし後醍醐帝の御時にや、魔僧ありて、此流の説を書しをも禁制ましめて、其書を焚すてられしとかや承る、かの厩戸皇子の頃は、學問未熟にありしすら、日出處天子、日沒處皇帝と書て、同等に抗衡せられしぞかし、吳の太伯の裔といは、神州の大寶、長く外國の附庸をまぬかれがたからん、されば此書は、吾國の醜を萬代に残すといふべし、はやく林氏に命じて、此魔説を削り、正史のまゝに改正せらるべし、さは侍らぬかとのたまへば、尾紀の兩君もうなづかせたまひ、執事の人々も、御確論に伏せられて、梓行をとめられ侍りぬ、

〔集義外書^{十四}〕朋友問、日本には、氏筋を申國にて御座候に、近世は武士の氏筋は、大かた亂てゑられず候、名乗度氏を名乗ても、誰とがむる人もなし、本より氏系圖ありて名乗人といへども、度々の亂世に其系圖、いづちへか行てゑられぬゆゑに、氏なき人が今名乗もたすべき様なし、近年氏系圖つり出し候は、學文者を頼み候へば、何方へつりつゞけ候はんもまゝにて候、大系圖とてあるも、其大系圖こそはあれ、その系圖へ飛入者は、誰ともまれば、有、日本の土民の姓と、天神の姓と、多はみだれ侍り、^{○下}略